第１回　安全走行支援サービス参宮橋地区社会実験検討会

議事要旨

◆日　時：平成１６年１２月２１日（火）　１７：３０～１９：３０
◆場　所：虎ノ門パストラル　新館４階　ミント
◆出席者：赤羽委員長（千葉工大）、大門委員（慶応大）、岩貞委員（モータージャーナリスト・エッセイスト）、両角委員（自動車評論家）、宮地委員、中神委員（国土交通省）、山田委員（国総研）、藤井委員（首都公団）、村岡委員（ＡＨＳ研究組合）
　オブザーバ：宮内氏、森田氏（警察庁）、椎名氏（警視庁）
◆資　料
- 安全走行支援サービス参宮橋地区社会実験検討会の設置について
- 首都高速参宮橋のカーブ区間における交通実態の分析と AHS の効果の報告
- VICS 車載器を活用したドライバーへの情報提供についての検討
- 社会実験実施方針の検討

◆議事内容

１．モニター公募について

岩貞委員　：モニターはここでサービスを実施していることに対する心構えが出来ているが、そうでない方が情報を受けたときの意見を拾えるとよい。
赤羽委員長：当該区間を頻繁に利用しない方の意見を吸い上げる工夫が必要である。
事務局　　：首都高速料金所でチラシを配る予定としており、そこに URL を記入するなどしてモニター以外の声を取り込めるようにしたい。

２．VICS車載器を活用したドライバーへの情報提供について

両角委員　：初めて情報提供を受けたドライバーが適切に反応してくれることが重要である。特に、上流側にある新宿カーブや合流部の注意情報がカーナビから出てくる中で、今回の情報をどのように認識してもらうかを検討すべきである。
宮地委員　：ＡＨＳはかなりクリティカルな状況を議論してきているが、今回の実験サービスはそれほどクリティカルでない世界で出来上がっていると考えられるため、メッセージの出し方が重要である。
赤羽委員長：提供する情報内容は既に情報板において実施されているものであり、ドライバーが弛緩状態から緊張状態に移行すれば効果は大きいのではないか。トータルで効果が大きければ、多少のデメリットがあっても実験として実行することが大切である。
大門委員　：今回のドライビングシミュレータ実験は、被験者に対して事前にサービス内容を伝えずに行ったが、全員が情報提供後に心構えをしていることは重要である。既往研究では心構えの有無により制動の質が異なることが分かっている。

３．社会実験実施方針について

(1)交通流の観測
赤羽委員長：速度抑制効果は特に高速域の車両がどの程度低減したかを分析すべきである。

事務局　　：カーブ進入速度については、高速域の車両を中心に天候等の周辺環境も考慮して分析していきたい。

(2)情報内容

赤羽委員長：今回のサービスはどのような条件で運用されるのか。路面状態によって変えるのか。

宮地委員　：渋滞が延伸してカーブ手前から末尾が確認できる場合でも情報提供を行うのか。

事務局　　：路面状態で情報内容を変えることは考えていない。また、渋滞がカーブ手前の直線まで延伸した場合には情報を出さないようにする。情報のプライオリティ付けや天候・車種等きめ細かい情報の提供は次世代の新しい車載器において検討したい。

両角委員　：今回の表示内容は具体的にどのようなものを考えているのか。

事務局　　：「渋滞」で統一することを考えている。

赤羽委員長：実際の事象とは異なる情報であるにも関わらず、「渋滞」で統一して逆にドライバーの混乱を抑えることは、実質をとったということで評価されるべきものである。

大門委員　：「渋滞」によってドライバーがこの先の車線閉塞をイメージすることが重要であり、既に情報板で使われている図形を用いることも重要である。

(3)新たな事故発生の可能性

岩貞委員　：今回の情報を受けた VICS 搭載車が減速・停止し、その後続の大型車が情報板「300m 先渋滞」を信じてあまり減速せずに追突するケースが心配である。

藤井委員　：当該箇所に設置予定の情報板には AHS のセンサーを連動させるので、300m 先渋滞とは異なる内容になると考えている。

(4)本サービスの意義

赤羽委員長：今回の実験は路車協調サービスのきっかけとなるものである。将来は個々の車両に応じた情報提供に向かうことを期待している。

両角委員　：本当に危険な状況を知らせる際には色遣いを赤にするなどの工夫が必要である。また、路線特性等による特殊性を考慮していくことが必要になる。

赤羽委員長：今回のサービスは速度規制を狙っているのものではなく、ドライバーが持っている速度の選択基準の一つに今回の情報が役に立てばいいのではないかと考えている。

４．その他

事務局　　：今後のスケジュールとして、社会実験を３月から開始する予定としており、その実験結果を踏まえて、６月頃を目処に第２回検討会を開催したいと考えている。

以　上